2018.10.1

むらかみ元気マガジン

Vol.18

協働のまちづくり情報発信誌

地域づくり 次の一手を考える

「地域づくりは人づくり」

人口減少と少子高齢化が進むや、今まで通りにはいかないこともあります。

時代に合わせて本当に大切な「芯」の部分は守ること!!(変えてはいけないものもあると思います。)そのためにも自分が住んでいる地域を見直し意識することが大切です。

自分の集落だけではできないことも他の集落の力を借りれば実現できるかもしれません。近隣集落との交流や助け合いも必要になります。年齢や性別にとらわれず、頭を柔らかくしていくことが大切になってくると思います。

砂山地域集落支援員 阿部 久美子

CONTENTS

【特集】地域づくり 次の一手を考える！ 2

中学生以上の全住民を対象にしたアンケート調査で住民ニーズを可視化する 5

アンケートのその後… 6

雑感 地域づくり 次の一手を考える！ 7

面白い人・取り組み紹介 砂山地域 集落支援員 阿部久美子さんに直撃！ 8

地域団体紹介 一般社団法人 高根コミュニティラボ わぁら

特集

地域づくり！次の一手を考える！！

人口減少・少子高齢化が急激に進展している今、地域づくりはこれまでの延長線上ではなく、将来を見据えた取組に“進化”していかなくてはなりません。では、地域づくりを進化させるための「次の一手」とは、どのようなものなのか？いま、地域内ではそれを模索する取組が各地で始まっています。

今回の特集は、「次の一手を考える」というテーマで、地域内での取組をご紹介します。

中学生以上の全住民を対象にしたアンケート調査で住民ニーズを可視化する

「次の一手」を考える上でまず大切なのは、地域住民の皆さんが何を思い、地域にどんなニーズがあるのかを、しっかりと把握することです。その際、思い込みだけでモノゴトを語るのではなく、きちんと数値で浮かび上がらせていくことが大切です。

その手法として近年注目されているのが、中学生以上の全住民を対象にしたアンケート調査です。住民アンケートは、これまで様々な機会で行われていますが、そのほとんどが各世帯向けに実施されています。実はこのやり方、地域単位での住民意向調査としては、あまり適切な方法でありません。

世帯向けのアンケートは、大半は世帯主が回答していると思います。世帯主は男性かつ年配の方であることが多いため、世帯単位でアンケートを実施すると、どうしても「年配の男性」の意向が色濃く反映されてしまいます。

少子高齢化が急激に進展しているいま、若者はすでに少数派となっています。また、地域内の各種団体の役員も男性が大半であるため、女性の声というのはなかなか届きにくいのが実状です。

若者や女性の声をきちんと集めるためには、一人ひとりから意見を伺う形式が必要であることから、中学生以上の全住民を対象にするのです。かなりの労力は掛かりますが、その分、潜在的なニーズや世代間の意識の違い、これからの地域づくりで重視していかなくてはならないことなど、大変興味深い地域の実態が浮かび上がってきます。

昨年度は6つの協議会で実施 回収率はなんと約8割！

村上市内では、昨年度、6つのまちづくり協議会で、中学生以上の全住民を対象にしたアンケート調査を実施しました。

アンケートの回収率は6協議会全体でなんと約8割！一般的に、こうしたアンケートの回収率は2～3割あれば上出来と言われていることを考えると、驚異的な数値です。これだけの回収率であれば、間違いなく住民意向を正確に反映しているデータだと言えるでしょう。

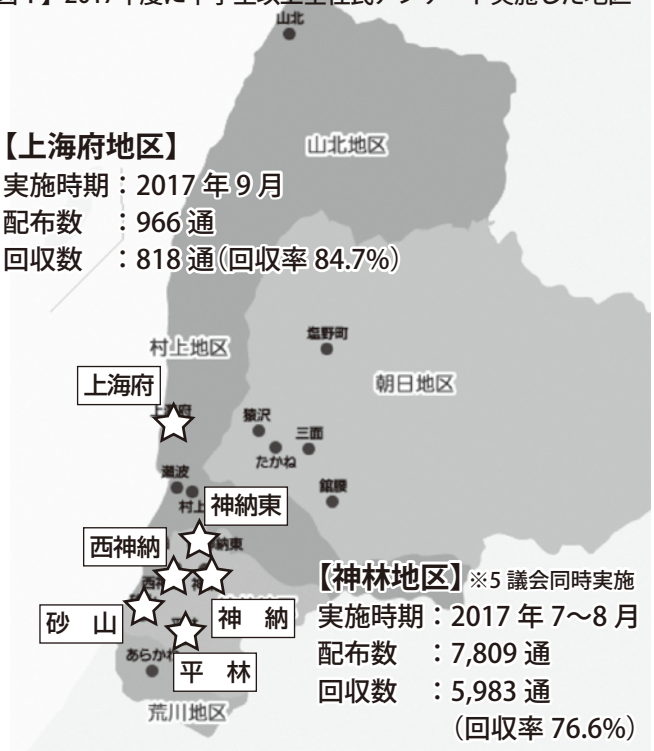
「アンケート結果から見えてきたこと」

アンケートでは、地域への要望ではなく、一人ひとりの考え・想いを尋ねました。その結果、地域ごとに大変興味深いポイントがいくつも浮かび上がってきました。

本稿では、全体的に共通する主な傾向・ポイントをピックアップしてご紹介します。

※アンケート結果は、各まちづくり協議会のホームページで公開されています。詳細はそちらからご覧ください。

【図１】2017年度に中学生以上全住民アンケート実施した地区



農業従事者の8割以上が60代以上

アンケート回答者の属性（性別・年代・仕事など）を分析した結果、どの地域でも農業従事者の8割以上が60代以上であり、このままいくと20年後には1/3以下になることが見えてきました。

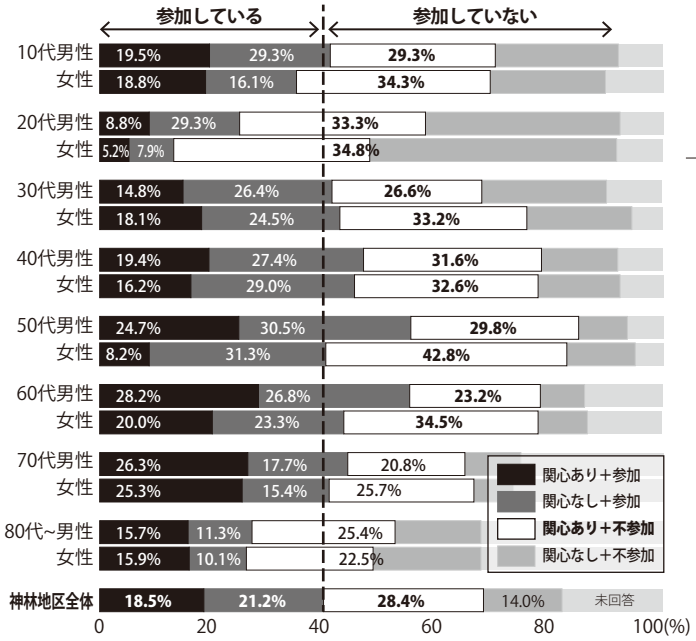
これは産業としての担い手不足ということだけでなく、「農地の維持管理をどうする」という問題も、地域に大きくのし掛かっていることを示唆しています。

80代女性の75%以上が日常的な移動手段は「車以外」

日常的な移動手段を尋ねたところ、「自動車」と回答している割合は70代から低下しはじめ、80代以上の女性にいたっては、4人に3人が日常的な移動手段が「自動車以外（バス・タクシー・自転車・徒歩など）」と回答しています。

村上市の人口は減少傾向ですが、85歳以上の人口については、今後も増え続けると予測されています。加齢によって車の運転ができなくなり、日々の生活に影響がでる人の数が今後さらに増えていくということを、この結果は示唆しています。

【図２】年代別男女別「地域活動への関心」集計結果（神林地区）



地域活動に参加しないのは「無関心」が理由ではない

アンケートでは、「あなたは地域活動に関心がありますか？」という問いに対して、

①関心があり積極的に参加
②関心はあるが積極的に参加せず
③関心は無いが付き合いで参加
④関心は無く関わりたいとも思わない

という4択で回答してもらったところ、どの年代も3〜4割の人が「関心はあるが積極的に参加せず」と回答していました（図2）。つまり、地域活動に参加しないのは必ずしも『無関心が理由では無い』ということです。

また別の質問で、「女性や若者の声がもっと反映されるべきだと思いますか？」と尋ねたところ、30〜40代の6割近くが「そう思う」と回答していました。

この結果は、『地域活動や会合の持ち方などを見直すことで、今まであまり参加していない層（特に若者や女性）の参加が得られる可能性がある』ということを示唆しています。

地域・集落への定住意向は「若低壮高」傾向

「あなたは今後もこの地域・集落に住み続けたいと思いますか?」という質問に対して、3択（思う・思わない・わからない）で回答してもらったところ、全体では6割近くが「住み続けたい」と回答しています。

しかし、神林地区では30代以下、上海府地区では50代以下が、地区全体の平均よりもその割合が低いという結果が出てきました。

また、「自分の子どもにもこの地域・集落に住み続けて欲しいと思いますか?」という質問に対して、「思わない」「わからない」と回答した割合が、40代以下（これからの地域を担う世代）では比較的高めであることも見えてきました。

次の世代が地域・集落で暮らし続けられる環境を整えていくことが、喫緊の課題であることを示唆しています。

住民のニーズを「困りごと」と「満足度・重要度」から汲み取る

日常生活の中で不安に思っていること・困っていることを尋ねてみたところ、全体的に「健康面への不安」「冬季の除雪」「災害への備え」「日常の買い物が不便」「農地山林の維持管理」を上げる人が多いという結果でした。

また、地域で行われている約30の活動・テーマについて、「現状の取組に対する満足度」と「将来を見据えた重要度」をそれぞれ5段階で評価してもらいました。

ここから住民の方々が考えている「これからの地域づくりではこのテーマが大切だ!」を分析して導き出したところ、「空き家対策」「防災活動」「移動支援」などへのニーズが高いことが浮かび上がりました。（左の一覧を参照）

ニーズを踏まえ、自らできることを考え「実行」に移す

2つの地区では、各協議会で策定している「地域づくり計画」の見直し時期だったこともあり、このアンケート結果を踏まえて、平成30年度からの事業展開に反映しました。現在、各協議会では、次頁のような取組が動き出しています。

最初は小さな取組で全く問題ありません。きちんと住民ニーズを把握し、そこから自分たちでできることは何かを考え、実行に移す。地域づくりは、この積み重ねがとにかく大切です。

その際、留意しておくべきことがあります。これからの地域づくりは、足し算ではなく「掛け算」で考えることです。人口減少が急激に進展する中では、新たな事業を立ち上げるのではなく、既存の事業に「新たな要素を組み合わせる」ことこそが重要です。異なる分野、いままでまったく接点のなかった領域を組み合わせましょう。イノベーションとは、こうした組み合わせから案外生まれるもの。

とにかく、地域づくりは「歩きながら考える」です。

神林地区

※以下は地区全体での集計結果です。協議会単位での集計結果とは若干異なっています。

日常生活の中での困りごと（トップ3）

◇健康面への不安がある
◇屋根の雪おろしや玄関先の雪のけなど冬季の除雪
◇災害への備えや避難

これから取り組むべきこと（トップ3）

●状況把握、持ち主との交渉など、空き家の管理活動
→50代以上は圧倒的に将来に向けてこれが大切だという評価。

●避難訓練・連絡体制など、防災活動
→30～60代はこの必要性を強く感じている。

●見回りなど、防犯・交通安全活動
→30～40代は特に最もこれを求めている。

上海府地区

日常生活の中での困りごと（トップ3）

◇日常の買い物が不便
◇農地山林の維持管理
◇屋根の雪おろしや玄関先の雪のけなど冬季の除雪

これから取り組むべきこと（トップ3）

●状況把握、持ち主との交渉など、空き家の管理活動
→50代以上はこの必要性を強く感じている。

●買物・通院など、移動支援活動
→すべての世代でこの必要性を強く感じている。

●住民との交流や空き家紹介など、定住受け入れ活動
→30代以上（特に30～40代）がこの必要性を感じている。

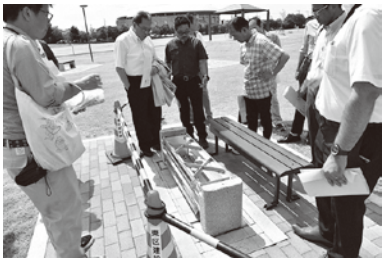
アンケート結果を踏まえた話し合いの様子
（上海府地区町づくり推進委員会）

アンケートのその後…

先進地視察で自分たちに出来ることを探る！

何が出来るのか分からない…そんなときは先進地視察！まちづくり協議会役員とともに新潟防災センターと新潟市東区にある寺山公園を視察し、公園内にあるベンチに着目。普段はベンチで、災害時にはトイレや炊き出し用のかまどに変身する機能を体感し、避難所への導入を検討しています。

砂山地域まちづくり協議会



ベンチがかまどとして利用できる

災害時に欠かせないトイレも見学

神林地区では防災の取組が加速！！

地域全体で防災訓練！

各集落ごとに行われていた防災訓練に加えて、地域全体としての防災訓練を計画。集落の役員が合同で訓練を行うことで、各集落で行われている防災訓練の質向上や、情報交換の場として活かせる可能性を見込んでいます。

砂山地域まちづくり協議会

自主防災組織連絡会議でまずは情報共有！

各集落に設置が奨励されている自主防災組織。組織はあるものの、どんな活動をしたら良いか分からないという状況があったため、まち協として自主防災組織連絡会議を呼びかけました。それぞれの地区でどのような活動をしているか情報共有し、災害への備えを検討しています。

砂山地域まちづくり協議会

地域の運動会に防災要素を組み入れる！

今年度 導入予定！

運動会の競技にタンカ作り競争を追加。また、借り物競走の借り物には防災グッズを導入し、懐中電灯、ラジオ、水など、避難するときに必要なものを学ぶことができる。今ある行事に防災要素をちょっとプラスしました。

神納東地域まちづくり協議会

上海府地区は空き家問題から着手

空き家の現状調査！

空き家問題は課題が大きく、どこから手をつけたら良いか難しいもの。まずは、今、どこに、どんな状態の空き家があるか１人ひとりが把握するところから空き家問題と向き合う機会を設け、今後の対策を話し合うきっかけを作ります。

上海府地区町づくり推進委員会

子ども・若者や女性の声を聞く場を作る！

対象者を女性や若者に絞った研修会や多世代が集う話し合い支援を実施。普段意見を聞きづらい人たちの声を集め、今後何に取り組んでいくかを考えるきっかけを作ります。

平林・神納東・神納
西神納地域まちづくり協議会

地域への愛着は育むもの！

地域づくり 次の一手を考える

都岐沙羅パートナーズセンター　近 良平

平成20年、5つの市町村が合併し、新村上市が誕生しました。

合併する前段階から、合併しても自立でも、小単位の行政体の必要性を感じていました。合併すれば小さな地域の声は届きにくくなる可能性があります。集落単位より広く、町村より小さい、明治の大合併程度の行政規模、つまり旧小学校の範囲です。このコミュニティ組織の強化が必要でした。

新村上市では旧自治体を中心にまちづくり協議会が組織されました。旧町村の大きさで作ったところや小学校区、中学校区といろいろな規模があります。しかし、私見ですが、村上市のまちづくり協議会も、地域づくりは目標としていても、どちらかというと文化・体育的事業に軸足があったように感じています。

自立の為に必要な組織は文化・体育のみでなく住民の生活に直接関わる事が大事だと思っていましたから、私としては忸怩（じくじ）たるものがありました。

そんな時に飛び込んで来たのが「小規模多機能自治」という介護施設のような文句でした。

「自分達の地域は自分達で創る」今思えばごく当たり前のことですが、何でもかんでも行政に頼る私達の意識には大変新鮮な感じを受けました。平成27年9月「小規模多機能自治を考えるセミナー雲南ゼミ（島根県）」に都岐沙羅パートナーズセンターから参加すると理事会で決定しました。

「雲南ゼミ」はまさに期待どおりのゼミでした。はっきり言って我々の地域よりももっと不便な土地で「自分達の地域は自分たちで創る」を合い言葉に様々な取組が行われていました。今まで漫然として取り組んできた事業を棚卸しゼロベースで検討します。

そして、地域課題のあぶり出し、次に課題解決の方法を決定、それでその全工程を住民の全世代の意見を取り入れて実行する。この意思決定の仕組みこそいま我々の地域で取り入れるべきだと感じました。現在、その動きが広まり、地域の声を集めるため中学生以上対象全住民アンケートなど各地域で続々と実施されています。

活動から持続可能な仕組みへ、奉仕作業的行事から収益の見込める事業へと様々な取組を進化させなければ、限られた人的、財政的資源を有効活用できません。限られた資源の有効活用こそ、今我々の地域に必要な事だと思います。

面白い人・取組紹介インタビュー

ささやかな願いに応える…

ぬくもりあふれた塩谷の「何でも屋」さん

阿部（あべ） 久美子（くみこ）さん　砂山地域 集落支援員

村上市塩谷出身。両親と夫、子ども２人の６人家族。高校卒業後、神奈川県の専門学校に進学し、美容師として勤務。23 歳のときＵターンし、美容師をしながら子育てに励む。2011 年、父の工場を手伝いながら、塩谷活性化団体「塩谷基地（しおやベース）」を立ち上げ、塩谷発信と買い物支援に取り組みはじめ、2018 年４月より砂山地域集落支援員として活動中。

地域を元気にする集落支援員

集落支援員は、市と連携しながら集落の維持、活性化や地域の課題解決に向けた取組を推進するために市から委嘱され、活動を行っています。村上市では昨年10月から導入された制度で、荒川地区金屋地域に１名と神林地区砂山地域を担当する阿部さんの計２名が活動しています。

塩谷の大きな家族に囲まれ育つ

現在、313戸871人が暮らす塩谷集落。幼い頃から地域の人との関わりが多く、大きな家族のように過ごしたという阿部さん。魅力的な人が多い塩谷の暮らしを見つめなおし、今後も残していきたいという想いで、２０１１年、子育てをしながら「塩谷基地（しおやベース）」という団体を立ち上げます。

空き施設を週２日の店舗へ活用

２０１２年、５年間空き施設となっていた元岩船漁業協同組合塩谷支所を塩谷町屋散策で利用しようと塩谷基地メンバーで清掃。それがきっかけとなり、２０１３年７月、週２日限定のお店「めでたや」が誕生しました。

店の奥にある座敷では、常に笑い声が響き渡っています

皆の「めでたや」サービス満点！

「めでたや」は生鮮食料品や生活用品、お菓子など品揃え豊富。近所の農家による野菜の直売も行われています。

この店では、いつ、どんなときもお客様目線です。お店で商品を選ぶ楽しみのために送迎を用意、配達希望者には商品をお届け。贈り物の配送伝票代筆。ネット注文の代行。挙げきれないほどの細やかなサービスが行われています。頼める場所がないほどのささやかな願いに寄り添う、ぬくもりあふれた「何でも屋」さんです。

店奥の座敷には人が集い、買物ついでにお茶を飲みながらの交流が生まれています。「塩谷の皆に支えられているお店だ」と語る阿部さんと店主、横山商店社長さん。

「めでたや」のような取組が塩谷以外にも広がっていくこと、そして「お互い様」の気持ちを大事に、塩谷の大きな家族と安心して暮らせる町を目指して活動されています。

買物ができるだけではなく、人のつながりを生み、皆で笑い合える場「めでたや」、そして、その場を支える阿部さんの存在は地域の皆にとって宝です。

２人揃わなければ「めでたや」は生まれなかった
横山商店社長さんと阿部さん

サンタクロースが突撃訪問し、プレゼント配り！！

地域団体紹介

一般社団法人 高根コミュニティラボ わあら

●活動分野：地域づくり全般
●活動地域：朝日地区高根

住　　所：村上市高根 679-1
TEL＆FAX：0254-75-5066
E-MAIL：info.takane@gmail.com
代表理事：遠山　真治

様々なアプローチで高根全体を盛り上げる

「わぁら」とは方言で「私たち」という意味。朝日地区高根で豊かな自然を活かした暮らしをつなぐこと、そして「大好きな高根に暮らしていて良かった」と言い合えるように、今の課題、そして未来の課題と向き合いながら、自分たちの手でワクワクする高根を創ることを目指して活動しています。

拠点となっているのは、築90年の空き家をリノベーションした「ゲストハウス瑞泉閣」。素泊まりの宿泊施設ですが、週1回「いっぷくどころ」という集いの場が開催されています。子どもからお年寄りまでが集い、時には宿泊されたお客様が参加。お客様とおばあさんが一緒に山菜採りへ出かける、子どもたちが高根をご案内するなど、地域内外、そして世代をつなぐ場となっています。

また、40代以下を対象として地域の現状や他地域の取組を学ぶ勉強会を開催。住民同士交流の機会をつくる居酒屋イベント、子どもたちと集落内を巡るハロウィンイベント、地域の現状把握と婚活要素を組み合わせ、高根全戸に若者サンタがプレゼントを配るクリスマスイベントなど、様々なアプローチで高根全体を盛り上げています。

いろいろな人が集うゲストハウス瑞泉閣

人数が少ない子どもたちのためには、夏季休暇中「たかね夏ゼミ」を開催。まちあるきや職場体験、お寺の掃除など、勉強に加え地域の人と触れあえる機会を作っています。また、子どもたちが企画運営するカフェイベントも実施。若者がサポートをして、子どもたちが大活躍しました。

昨年は今後大きな課題となる棚田と空き家の調査を実施。短期滞在のゲストハウスに加え、中長期滞在できるシェアハウスを整備しました。今は高根と地域外の人が繋がる選択肢を増やすための仕組みづくりに取り組んでいます。

若い世代の人たちとともに分野問わず、高根の「これから」を見つめ、ワクワクする未来を築く活動に今後も注目です。

編集後記

とりあえず調査を行ったはいいものの、結果を受けて何をするかを考え出すと、調査結果が自分たちにはどうすることもできない大きな重りのようにのしかかってくる。今やっていることで手一杯、新しいことをやるどころか、考える余裕もない。地域活動に関わる人から、苦痛の声が聞こえてきます。悪あがきせずに現実を受け止め、時間の流れに身を任せるという考え方もあるかもしれません。

しかし、今回取材に伺った先のお話しは笑顔と希望に満ちあふれていました。困り事や課題をきっかけに楽しく、ワクワクする取組や新たな人のつながりができています。これは地域課題がなければ生まれなかったものです。

昭和・平成の時代だけを見ても、時の変化に適応し、暮らしも物も価値観も取捨選択され、進化してきました。人口減少・少子高齢化時代の先駆者として、自分たちにできることを考え、小さなことから少しずつ動いてみる大切さを実感しました。

〈発行元情報〉
発　行　日　平成30年10月1日（年2回発行）
取材・編集　特定非営利活動法人　都岐沙羅パートナーズセンター
発行責任　村上市自治振興課
連　絡　先　0254（53）2111　内線3311